

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4090400468		
法人名	株式会社 ケア21		
事業所名	グループホーム たのしい家小倉北 (ユニット1・ユニット2)		
所在地	〒803-0836 福岡県北九州市小倉北区中井5丁目3番11号 TEL 093-562-0521		
自己評価作成日	令和04年02月03日	評価結果確定日	令和04年04月01日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号	TEL	093-582-0294
訪問調査日	令和04年03月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

日々活動的に過ごしメリハリのある生活を支援する。ご入居者各々が役割を持ち、できないの評価をし出来ることを行い、活動意欲向上を図っている。ご入居者と職員が共にという意識を持ち日々の生活を送る。又、ご入居者本位という経営理念の元各々の自己決定権を尊重し支援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「たのしい家 小倉北」は、地域密着型事業所として小規模多機能ホームと併設で、8年前に開設した、定員18名のグループホームである。コロナ対策以前は、町内清掃や小学校、市民センターの行事に参加し、併設事業所と合同で行う夏祭りには、家族や地域の方の来訪で盛り上がり、少しずつ地域交流が広がっていた。利用者や職員は、家族のような関係を築き、利用者の思いや意向を聴き取り、利用者本位の介護サービスに取り組んでいる。提携医療機関医師による月2回の往診と介護職員、併設事業所の看護師との連携で、24時間安心して任せられる医療体制が整っている。管理者と職員がチーム介護に取り組み、常に家族へ報告と連絡を行い、利用者や家族と信頼関係が築かれている。グループホーム「たのしい家 小倉北」である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き生きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、日常的に戸外へ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	コロナ渦の中、外出等難しいが、外出できるようになればと活動参加や計画を過ごしつつ考えている。	法人経営理念を申し送り時に出勤職員で唱和し、理念の共有に努め、利用者本位の介護サービスに取り組んでいる。また、地域密着型事業所として、地域の高齢者の悩みや心配事に応えられる事業所として、地域から頼りにされるグループホームを目指している。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	上記同様、地域密着型の観点から交流はできてないが意識は向上していると思う。	コロナ対策以前は、ホームの夏祭りに家族やボランティア、地域の方が参加している。町内会の役員や地域住民から、地域の行事や活動の情報を得て、町内清掃や小学校で行われるどんど焼き、市民センターの行事に参加して、少しずつ交流を広げていたが、コロナ禍の中で現在は自粛している。	近隣の保育園との交流や、小・中学校の職場体験、ボランティアの受け入れ等、積極的に外部との交流に取り組むことを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の人々に向けての活動は情勢的に難しいが施設間では研修や会議を活用し徐々に理解できている。職員各々が。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ渦で事業所内開催だが地域包括支援センター職員や自治会の方等意見を頂きながら質の向上を図っている。	コロナ対策以前は、運営推進会議を2ヶ月毎に開催し、自治会事務局長、地域住民、地域包括支援センター職員の参加を得ていた。会議は利用者状況や事故、ヒヤリハット等を報告し、参加委員から質問や意見、情報等が提案されて話し合い、介護サービスの向上に反映させている。	参加委員の増員に向けて取り組むことを期待したい。また、年1回でも、家族の参加しやすい日時に開催し、家族の参加を促していくことが望まれる。
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	必要時は相談等行っている。	運営推進会議に、地域包括支援センター職員が出席し、ホームの現状を説明し、アドバイスや情報提供を受け、協力関係を築いている。管理者は、ホームの空き状況や事故等の報告を行政窓口に行い、介護の疑問点や困難事例を相談する等、情報交換しながら連携を図っている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関しては年2回以上は研修を実施し、知らずに不適切なケアを行わないように周知している。	職員会議終了後、身体拘束の研修を実施し、新聞やテレビの事例を挙げて話し合い職員間で共有している。各フロアから委員を出して、看護師と一緒に身体拘束適正化委員会を開催し、禁止の対象となる具体的な行為の確認と職員への周知を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様。介護施設において一番の問題点でもあるので研修を中心に周知すると共に職員も通報意識を持っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度活用している。細かく学ぶことまでは至ってないと思う。(全職員)	日常生活自立支援事業や成年後見制度の資料やパンフレットを用意し、利用者や家族に制度の内容や申請方法を分かり易く説明し、利用者や家族から相談があれば、制度の活用に向けて支援が出来るように取り組んでいる。現在、制度を活用している利用鯖いる。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	その都度説明している。		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見に関しては管理者と計画作成、ご家族間で話し合うことが多い、ご家族とは誤解等ないよう普段から管理者だけでなくコミュニケーションとるようにしている。	職員は、利用者とのコミュニケーションを取りながら、意見や要望を聴き取り、出来る事から介護サービスに反映させている。家族面会時に、職員が家族の意見や要望、心配な事等を聴き取り、ホーム運営に反映させている。また、ホーム便りを2ヶ月毎に送付し、家族の安心に繋げている。	行事を兼ねた家族会を開催し、家族とコミュニケーションをとる中で、共に利用者を支える信頼関係を築いていく事を期待したい。
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	基本的には管理者の考えを通すのではなく、経営理念から「常に考え、変わり続ける」とあるので全職員が意見出しやすい環境づくりと意見を集約する役割を管理者が行っている。	併設小規模多機能ホームと合同の全体会議と部署会議を毎月開催し、利用者一人ひとりのカンファレンスを含めた話し合いを行っている。会議で出された意見や要望は、ホーム運営や業務改善に反映させている。また、管理者は職員の話をよく聞いて、風通しの良い職場環境を目指している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与面への反映は一管理者では難しいが、いいところ悪い所を各々理解し、そのために話し合っている。指摘より褒められる方が向上心をもってできるのでまずは改善し一人一人の人格を尊重する意識を持つことを伝えている。		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	採用に当たってはどちらかというと排除対象の方が定まってない。経営理念を理解し切磋琢磨しチームとして共にやっていきたいと思ったら問題ない。後は採用になっても配慮できるようにできるだけお話を聞くようにしている。	管理者は、職員の特技や能力を把握し、適材適所に人員配置して、職員一人ひとりが生き生きと働ける職場環境を目指している。職員の募集は年齢や性別、資格等の制限はなく、人柄や介護に対する考えを優先し、採用後は新人研修や、スキルアップ研修に取り組み、職員の質の向上を目指している。	
14	10	○人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	経営理念にも「人を大事に人を育てる」の観点から人材を人財と呼び人は宝だという認識を持つように法人として努めている。人権の研修に関しても行っており周知している。	職員会議や毎日の申し送りの中で、利用者の人権を守る介護サービスについて話し合い、職員の意識づけを行っている。特に、慣れからくる言葉遣いの乱れや対応に注意して、利用者ホームの中で安心して暮らせる環境整備に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	誰伸び人事制度というものがあり、誰でもリーダーになれるということ伝え、段位認定制度というもので介護技術等の評価を実施し、面談等もやっている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	前年に比べると同業者との連携は増えていっているように思える。例えば入居、待機状況の共有や介護に関しての共有を少しずつ出来る様になった。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	アセスメント等で事前情報を理解した上でご本人の面談だったり状況の把握に努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご本人もそうだが自身で判断が付きづらいこともあるのでそういう時はご家族中心に要望や将来的な以降も把握し全職員で共有し支援するように心掛けている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状態に応じて、どういったサービスが良いか、又、入居系施設を検討されてもADL、認知面含め併設の小規模多機能も案内したりとその方の状態を聞いた上での助言等を行っている		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共同生活介護という意識は会議等でも周知できるように動いている。そのうえで基本的にはできないことを支援、日常生活において共に生活するを意識し、心賭けている		
21		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	基本的にはコミュニケーションを取りながら関係性築き、あとは報連相を大事にすることでより関係性が気づけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現状難しいが、やはり今まで育った環境等を大事になじみの方や社会との触れ合いが大事になりそれが地域密着型施設の良さなので可能な限り実行している。	コロナ対策以前は、馴染みの知り合いや友人等の面会が多いので、必要時には、職員が間に入る等して懐かしい時間を過ごせるよう配慮している。また、家族の協力を得て帰宅したり、旅行に出かける等、ホーム入居で利用者が培ってきた人間関係や、地域社会との関わりが途切れないように支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同生活において日々一緒に生活されるので関わりは毎日あり、ご利用者間だけで通じ合う会話もあるので支えるというより見守っている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後のご家族のつながりもあり、併せて本人の状況も確認しつつ援助していることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	全て要望を受け入れることは難しい件もあるが介護の基本としてご利用者本位で支援している。	職員は日常会話から、利用者の思いや意向を聴き出して、職員間で情報を共有している。意向表出が困難な利用者には、家族に相談したり、過去のアセスメントを読み返し、職員が利用者寄り添い話しかけ、利用者の思いに近づく努力をしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントにて把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	お一人お一人を評価し残存機能やできることの把握に努め共有する。職員間でできるできないが別れることはあるが支援方法も検討している。		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の会議や担当者会議等で話合うことがメインになるがケアの統一を意識して介護計画を作成している。	面会時や電話で、家族の意見や要望を聴き取り、カンファレンスで職員の意見を聞いて話し合い、利用者本位の介護計画を6ヶ月毎に作成している。また、利用者の状態変化に合わせて家族や主治医と話し合い、現状に即した介護計画の作成をその都度行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録や毎日の申し送りで情報共有した上でケアマネージャーが介護計画見直しを図っている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々生活においてニーズが生まれ、状況やADL,等の変化に応じて対応を変えていっている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	グループホームにおいては地域資源の把握と暮らしの支援が大切なので理解の上、出来る様になっている。		
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の意向を理解することは勿論、小さな気づきを大切に状況変化を把握し医療との連携を図るようにしている。	入居時に、利用者や家族の希望を優先して主治医を決定し、かかりつけ医の受診は家族が同行している。提携医療機関医師による月2回の往診と看護師、介護職員との連携で、利用者の小さな変化も見逃さず、24時間安心の医療体制が整っている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週一回の訪問介護や往診も含め情報収集や助言をもらいながら支援している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	その都度状況報告は看護師や相談員の方と中心に退院調整をしている。施設で対応可否もあるので報連相を大事にしている。		
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時にご家族の意向も把握している。意向の変化もあるので、チームでいかに取り組めるかを意識して取り組んでいる。	重要事項説明書を基に、ホームの方針を契約時に利用者や家族に説明している。利用者の重度化が進むと、家族や主治医と話し合い、今後の方針を確認し、関係者で方針を共有し、利用者の終末期が安心して過ごせる支援に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	併設事業所の小規模多機能の看護師等で勉強会を実施し、把握、実践に努めている。		
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	BCP作成と訓練の参加のお声掛けはできているし地域の方の協力は必須なので、今後の課題としていかに参加して頂ける環境を作れるかを考えていかないといけない。	防災訓練を年2回昼夜を想定して実施し、2階と3階の利用者18名を、夜勤者2名で一時避難場所に安全に避難誘導出来るように訓練している。非常災害時に備えて、カセットコンロ、懐中電灯、毛布、非常食等を準備している。	居室が2階、3階にあるため、特に夜間の避難訓練に重点を置き、各ユニット、併設の小規模多機能事業所との連携を確認し、利用者を安全に避難誘導出来るよう、繰り返し訓練する事を期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇面での課題もあるが特に重要視しているので研修や現状の把握、不適切か否かを会議等で話し合っている。ご利用者本意が尊重にもつながる。	利用者のプライバシーを守る介護の在り方を、職員間で話し合い、親しくなりすぎて、馴れ合いにならないように気をつけ、言葉遣いや対応に注意している。意向表出が困難な利用者には、家族に相談したり、職員間で話し合い、利用者の表情や仕草を観察しながら思いに近づく努力をしている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定の支援は施設のビジョンでもあり意識や話しはしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員中心、業務をしないことは開設当初から伝えており、職員中心の思考になってないか根拠を持って発言するようにしている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出等はできてないが選ぶことも自己決定権と意思尊重の支援につながるので出来るだけ実践している。		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	グループホームにおいては共同生活を意識しているので共に生活する内の残存機能を活かしながら支援している。	配食サービスを利用し、温めてつぎ分けて料理を提供している。コロナ対策以前は、利用者の希望を聴いてピザの配達や手作り弁当を持ってドライブに出かける等、気分転換を兼ねた食事の支援に取り組んでいたが、コロナ禍の中で現在は自粛している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	病的なものもあり各々違うが、一人一人の健康管理をしなければならないので食事、水分量は意識しながら支援している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔衛生管理体制加算取得。先生や衛生士の助言のもと支援している。		
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンの理解はまだ改善が必要だがオムツ等検討する場合は必要性を話し合い、自立に向けた支援はできていると思う。	利用者が重度化してもトイレで排泄を基本とし、職員は、利用者の生活習慣や排泄パターンを把握し、タイミングを見ながら早めの声掛けや誘導を行い、トイレでの排泄の支援に取り組んでいる。夜間帯も、利用者の希望や状態に配慮しながら、トイレ誘導を行っている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢者においては便秘はありがちですが、上記同様排泄パターンの把握と運動、飲食物をその都度応じた対応に取り組んでいる。		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	状況に応じて入浴日変えることもあり浴槽にゆっくりつかられている時に対話時間を作りコミュニケーションを図っている。	利用者の希望や体調に配慮して週2、3回の入浴支援を行っている。入浴を拒む利用者には、足浴や清拭に変更し、無理強いのない入浴支援を行い、清潔保持に取り組んでいる。また、入浴は、利用者と職員が一对一で話ができる機会と捉え、会話を楽しみながら、楽しい入浴になるよう取り組んでいる。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠時間や間隔は各々異なるが安心して休まれることは職員の日頃の対応や信頼でも関わってくるのでそこを意識するようにしている。その人が安心できる対応、環境を理解することも大切。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	往診時等処方された場合の注意点等共有、理解している。既往歴等の把握にも努め服薬時の飲み込み確認も意識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	施設でのビジョンにも挙げている。役割がやりがいになり生きがいにもつながる。認知症状の緩和も可能になる為、食事以外も楽しみを見つけ出来ることを継続して出来る様に支援している。		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出はできないが駐車場で日向ぼっこしたり外の空気を吸うことや季節を感じるように支援している。今後は情勢次第で外出できる環境づくりを実施、支援していく。	コロナ対策以前は、天気の良い日を利用して近隣の公園を散歩したり、ドライブに出かけ、利用者の気分転換を図っていた。また、外出レクリエーションを計画し、季節毎の花見や外食、買い物等、家族と協力しながら戸外へ出かけられる支援に取り組んでいたが、コロナ禍の中で現在は自粛している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物もお金を持つ、精算、選ぶ等行うことが社会とのつながりにもなっていると思う。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙や電話、今ではタブレット通話等ご家族とコミュニケーションをとる環境を定期的に支援して言う。		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	まずは衛生面に気を付け行事等での創作等で季節感を感じる様に支援している。	明るくゆったりとした造りの室内には、月日が分かるように利用者と職員と一緒に制作したカレンダーや季節毎の作品を飾り、ホームの中で季節を感じられるよう工夫している。室内は照明や音、温度や湿度に配慮して、清潔で明るい雰囲気の共用空間である。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアで過ごされることもおおいので支援というよりは各々が自然と話したりする状況である。		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なじみ深いものがあることが安心にもつながるのでその点をご家族と話し合ったり工夫している。	利用者が長年使い慣れた馴染みの家具や寝具、身の回りの物、仏壇や人形等、大切にしていた物を家族の協力で持ち込んでもらい、生活環境が急変しないように配慮し、利用者が安心して穏やかに暮らせる居心地の良い居室である。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	環境整備やできることの理解できない事の把握することでより安心した生活ネガティブな思考なく明るく生活できるように支援している。		